

中矢 温

かき氷徒歩圏内がぜんぶ晴れ

走ったから泡立つ麦茶だったんだ

罌雲こも誰かの歌枕

晴れだから徒歩で行けるのではなく、自身の徒歩圏内が晴れになっていく。ある種の全能感ともいえるエネルギーの源が「かき氷」。夏を存分に楽しんでいるのが伝わる。／幼少期には原理が分からず魔法のように感じていたことがたくさんあった。原理が分かれば魔法は解けてしまうけれど、当時の輝きは何度でも想い出せる。中矢氏の作品は、結果や答えに対する理由づけが主体独自のもので、整合性はないのだけれど、説得力がある。それは自身の感覚を心から信頼しているときに生まれる力である。

高田 皓輔

「うそつき」の／ 「そつき」の部分だけ響く

電流が／君と、／手渡すプリントをつたって／私は、／回路になった

両作品とも佳作に、一作品目は月次総評でも取り上げた。激情は芸術の糧になりやすいけれど、最中にいる間に作品にするのは難しい。しかし早く書かないと鮮度は失われていくというジレンマ。高田氏は鮮度と精度を保つ技術力が高い。「うそつき」と吐き出した瞬間の響き、「君」と何かが繋がったような感覚を逃さない。

塩田 きよら

脊椎の窪みの鋭さをなぞる／きみは死んだら良い薔薇になる

半熟のすももを撫でる／親指の腹で円周率がはじけた

人は死後も「薔薇」にはならない。主体も「君」もそれはわかっているが、「良い薔薇」になる、という。幼少期の将来の夢のような、易しくて甘い慰め。だが、何にでもなれると思っていたあの頃が死後に再び戻ってくるのだと教えてくれる。二作目は月次総評でも取り上げたが、「すもも」に「円周率」を感じた作者。読み手も今後丸い果実に円周率を見るようになるだろう。物に触れることを言葉に触れることと感じていて、言葉の先に踏み込みたいという意志を感じさせる表現が上手い。読んだ後のこの世の見え方を変えてくる。

小笠原 風花

寂しさが目配せしてくる教室で／便覧ばかり読んで過ごした

廃番のチークみたいな秋夕焼

キャラクター葬という名の卒業式

擬人化した「寂しさ」の「目配せ」は優しくなさそう。何をしていても退屈で苦しい教室。／もう手に入らないチークのカラー。けれど、それは人から選ばれなかった故の廃番。廃番についても夕焼けの色に優劣を決めるのも人間しかない。／学校で生き抜くにはキャラが必要だった。卒業式はそのキャラを死なせる時でもある。主体にとってこのセレモニーの主は「キャラクター葬」。“哀しさ”は言葉で辿りやすい感情であるが、凡庸になりやすい。そこに作者のスパイスが光る。

郡司 和斗

くりかえす青葉の／くりかえさない涼しさに／きつと なんと／まばたきしたら  
手を浸して／あたたかいプール／金木犀のいま降るところ

ガチャのカプセルには／母の模型が入っていて／午後から雨だと教えてくれる

「くりかえす」ことで形が生まれ、しかし形が生まれることでそこから出られなくなる。私たちはいい面も悪い面も背負いながら形を得ているけれど、一回きりで散る青葉のあつけない美しさを思う。「きつと」の先は言葉を繋げることができなかった。言葉にすること、想いを繰り返すことになるから。青葉のように形を持たせることなく終わらせたかったものが主体の中にはあったのだ。視覚的に鮮やかなアプローチをする作風。この世に先に存在する形のあるものを通し、想いだけで漂わせることでしか保てないものを大切にしているようである。

今回惜しくも受賞を逃したが、吉沢美香氏の作品も推していた。

爪先が毛布に触れるたび静か

薔薇咲いて指の先まで目を閉じる

先に衣擦れの音を描き沈黙を聴かせたり、「薔薇」の香りを嗅ぐときに身体の奥まで香りに浸る描写など、繊細な身体感覚が上手い。今後も注目したい。

今年度の奨学生は大学生のみでした。自分が大学に通っていた頃、非常に変化の多い時間を過ごしたことを思い出します。十代の頃に抱えていた「切実な青さ」は、どれほど激しく抗っても全く同じものを持ち続けることはできないと感じています。しかし私たちはその葛藤の過程も書き残すことができます。生みの過程でしか生むことができないものがあり、変化の先に新たに手にしたものをまた読ませていただきたいと思っています。皆さまお疲れさまでした。